

1 はじめに

未来を生きる子どもたちを育む学校の使命

現代の子どもたちが生きる未来は、変化の激しい予測不可能な時代であると言われている。様々な場面においてAIの活用が今まで以上に進み、「SDGs（持続可能な開発目標）」の実現と、「日本社会に根ざすウェルビーイング（精神的な豊かさ）」の向上が、より強く求められていくと思われる。

また、子どもたちを取り巻く現在の環境は、いじめや不登校、虐待、貧困等、現実的な深刻さが加速する一方である。社会的には、コロナ禍を経て人々の考え方や暮らし等に様々な変化が見られ、一つの大きな転換期となっている。これから少子高齢化がさらに進み、学校だけでなく社会全体においてもこれまでにない大きな変化が生じることも予想される。これらの課題の要因は表面だけでなく、その背景にも様々な因子が複雑に絡み合っている場合も見られ、容易に解決できないだけでなく、元々解決が大変困難である場合もあると思われる。

このような未来の中、子どもたちがしなやかに、そしてたくましく生き抜くために備えるべき力は何であるのか。その力を現小学校学習指導要領では、「資質・能力の三つの柱」として、①知識及び技能 ②思考力、判断力、表現力等 ③学びに向かう力、人間性等と整理した。また、2021年の中教審答申（令和の日本型教育）では、目指す子どもの姿を「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手」と示されている。「社会的な課題には社会全体で立ち向かい、試行錯誤を繰り返しながらよりよい方策を探し続ける力」こそ、子どもたちが明るい未来を創造するために必須な資質・能力であると考えます。

静岡県では、「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」を、第二次富士市教育振興基本計画では、「明日を拓く 輝く『ふじの人』づくり」を基本目標とし、「明日を拓く人材を育成する教育基盤の推進」「学びを楽しみ、輝く子どもの姿を実現する学校教育」「生涯にわたって学び続ける『ふじの人』の育成」の三つを教育振興の基本施策として掲げている。

県、市の方針を受け、これからの学校の使命は、子どもたちが自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していけるよう、学習指導要領に示された資質・能力を育てていくことである。同時に、「こども基本法」「富士市子どもの権利条例」「生徒指導提要」の目的及び内容を私たち教員が正しく理解し、子どもたちの人権を守り、自尊感情を高めつつ、伴走者として一人一人の子どもに寄り添いながら共に学んでいくことであると考える。

「時を守り、場を清め、礼を正す」これは、哲学者 森 信三氏の言葉である。この言葉は人々が健全な集団を形成し、個や集団を成長させるにあたって、とても大切な要素を言い表している。子どもたちの学びの場である学校においても、この言葉は十分当てはまる言葉である。私たち教職員も日々の教育活動に従事するにあたり、心に深く刻んでおくべきとても大事な言葉であると考えます。

子どもたちが安心して、主体的に、時には他者とかかわり合いながら生きる力を獲得するためには、学校内の「学びの環境」を整えることが重要である。本校の子どもたちの実態と照らし合わせ、「学びの環境」を整えるために学校のあるべき姿が以下の3点である。

- (1) 学校が、生き生きと学べる、安心・安全で充実した学びの場であり続けること。
- (2) 学校が、互いの多様性を認め合い、健全な人権感覚を育む場であり続けること。
- (3) 学校が、自分自身の成長を認識し、自己肯定感や達成感を実感できる場であり続けること。

以上のことを念頭に置きながら、「三部会」を軸とした子どもたちの主体性を育む創造的な教育活動を縦糸とし、「学年部」を軸とした地域と連携した学び・人権教育・福祉教育・健康教育・環境教育・SDGs・キャリア教育・食育・防災教育等を横糸として、教育課程が多角的な視点と子どもを誰一人取り残さないという強い覚悟をもって編成され、全教員が同じ方向を向いて教育を実践する学校を目指していきたい。

また、特別支援教育にも重点を置き、**特別支援学級「おおぞら」**に在籍する子どもたちが、その子に合った学びに取り組んだり、様々な行事や体験活動、小中一貫教育としての3校交流行事等を通して、互いのよさを感じ、協働する楽しさを味わったりできるようにしていきたい。校内においても、所属学年の子どもたちとの交流活動や学年行事への参加を今後も継続していく。

さらに、本校に通う様々な国籍の子どもたちも安心して共に学び合い、互いの考えや言葉、生活習慣等を認め合い、尊重し合う多様性を包括する学校づくりにも取り組んでいきたい。現在取り組んでいる「**おひさま**」においての丁寧できめ細やかな学習指導、日本の伝統行事や風習、生活習慣の紹介等は、外国籍の子どもたちにとってじっくり学べる時間であり、安心につながっているとと言える。多様性のある本校で学ぶ子どもたちは、将来において互いに認め合い、尊重し合いながら協働していく社会の創り手に成長していくと信じている。

2 学校経営目標

未来をしなやかに生きる子どもたちを育む学校

「育む」：親鳥が雛を羽で包み守るように、愛情を込めて大切に養い、育てること。

転じて、心身の成長や才能、愛情、文化等を大切に育て、発展させること。

⇒「吉原小学校の子どもたちを大切に守り、愛情を注ぎ、育てる。」

明治6年、吉原本陣から問屋場に移転し「仰成舎」として開校した吉原小学校は、富士市の中でも長い歴史と伝統を誇り、2023年6月1日に創立150周年を迎えた。地域で活躍する卒業生と元・現PTA役員を中心とした実行委員会により、温かい記念事業を実施した。その過程では、地域住民の学校に対する関心の高さや愛着の深さを感じる機会が多く、開校以来地域の教育の中心となり、教育・文化発展を担う大きな役割を本校が果たしてきたことを強く実感することができた。現在も保護者や地域の方々の温かい支援をいただき、多くの方に支えていただいている吉原小学校である。

吉原地区の中心部に立地する本校には、約500人の子どもたちが在籍する。校区は東西南北に大きく広がり、市役所や市立中央図書館等の官庁や公共施設、市立病院や休日の救急医療センター、宿場町としての歴史をもつ吉原商店街、大きな商業施設や多くの飲食店、交通

量の多い主要道路とバスや鉄道等の交通機関、南には物流関係の会社や工場も存在する地域である。また、最近では高層マンションが校区内に多く建ち、校区内の様子も変化してきている。本校も少子化に伴って子どもの人数が減少し、学級数も以前と比較すると横ばいまたは減少傾向にあるのが現状である。子どもたちの中には古くからこの地域に居を構える子どもたち、他地域から転入してきた子どもたち、児童福祉施設から通う子どもたち、外国にルーツをもつ子どもたちがいて、出身地や母言語、考え方も多様である。しかし、親が子どもの健やかな成長を願う思いは、いつの時代も、どの国においても普遍的なものであり、優しく温かい愛情に支えられたものであると考える。多様化が進む本校においてもこの教育に対する普遍性を信じ、今後も真摯に教育を進めていくことが肝要である。

A I の発達や科学・情報技術の加速度的進歩、国際情勢の目まぐるしい変化、多様化が進むと予想される未来。その未来を生きる子どもたちにとって、本校での学びの中で多様性を身に付けることができ、多少困難さがあってもあきらめることなく、対話的・協働的に様々な人たちとつながる大切さを日常的に体験できる学習環境は、本校のもつ強みの一つと言える。

「教育は人なり（人は人によりて育つ）」と言われる。大人が自ら考え、判断し、協働して行動する姿を見て、主体的な行動や他者と協働することの大切さを子どもたちが学ぶ。また、寛容な心で他者のよさや多様性を認め、人権意識の高い大人の行動を見て、子どもたちは人権意識の高い他者尊重の心をもつことができると考える。

「一人一人の子どもは、かけがえのない存在である。」「子どもたちは、地域の宝である。」「子どもたちが、次の時代をつくっていく。」ことを念頭に、私たち教職員自身が日々の教育活動に使命感と誇りをもって職務に当たることが大切である。また、私たちの子どもたちにかける愛情、励ましや称賛の声が、温かく優しい心を持ち、互いに助け合いながら伸びていこうと自立する子どもたちを育てると考える。本校の教育活動を通して、子どもたちの中にたくましく、そしてしなやかに未来を生きるための「自立と共生」の心を育てていきたい。自立と共生の心をもった子どもたちが創る未来は、温かく明るい未来になると信じている。

その願いを込め、令和8年度の学校経営目標は、「未来をしなやかに生きる子どもたちを育む学校」とする。この学校経営目標の実現のため、以下に具体的手立てを示す。

(1) 子どもたちを組織で育む

学年の教員、養護教諭、事務室、給食室、CSD、SSS、SC、SSW、図書館司書、各種支援員、保護者、学校運営協議会委員や地域人材、その他関係機関と密接に連携し、情報共有と組織で対応する協力体制を今後も構築し、強化する。校内では全教職員で子どもたちを健やかに育む環境づくりを進めるとともに、保護者や地域にも積極的に協力をお願いし、「チーム吉原小」で子どもたちを育てていきたい。

(2) 「子どもたちの声」で学校をつくる

今年度の教育課程においても、引き続き子どもたちの「主体性を育む」ことに継続して取り組む。子どもたちが自己選択や自己決定の場を多く経験し、意欲をもって探究する過程を教師や仲間にも価値付けられることにより、子どもたちの自ら学びに向かう意欲を高めていきたい。また、子どもたちが自分の目標に向かって挑戦する機会（授業、行事、児童会活動、見学や体験学習等）を増やしたり、教職員の主体的に行動する姿を見せたりして、教育活動全体を通して子どもたちの主体性を育てていきたい。

(3) 教員は常に真摯に学び続けていく存在となる

私たち教員が子どもたちの成長の伴走者となり、静岡県教員育成指標の各キャリアステージ（採用時・基礎向上期・充実発展期・進化熟練期）において、実践と省察、及び改善を繰り返しながら、時代の変化に戸惑うことなく、教員として必要な資質能力（①授業力 ②生徒指導力 ③教育業務遂行力 ④組織運営力）をバランスよく身に付けていく教員集団でありたい。また、教員としての自覚を常にもち、「子どもたちを育む」という思いをもって接することで信頼関係を築き、子どもたちと共に本校の学びを進めていく教員でありたい。

(4) 創造的な提案と計画、実行をPDC Aサイクルで動かす組織として、「指導部」を位置付ける。この指導部の中の「豊かな心づくり部」「確かな学力づくり部」「健やかな生活づくり部」の三部で、子どもたちの声を生かした、よりクリエイティブな提案による教員の主体的な学校運営への参画を目指す。これにより、私たち教職員も試行錯誤を繰り返しながらキャリアを積み重ねて成長し、「互いに支え合い、高め合いながら、よりよい方向に変化していく」ことに前向きにチャレンジしていきたいと考える。

以上の4点を念頭におき、全教職員がベクトルをそろえて、共に「明日のよりよい学校」を創る組織でありたい。

3 小中一貫教育目標（学校教育目標）

あこがれ	チャレンジ	笑顔
夢をもつ子	たくましくがんばる子	仲間とともに喜ぶ子

平成30年7月に、吉原小学校・伝法小学校・吉原第一中学校の保護者・地域住民・教職員を対象とし、中学校卒業時の「願う子どもの姿」に関するアンケート調査を実施した。多種・多様な御意見をいただいたが、同年10月の三校合同学校運営協議会における協議を経て、校長等連絡会にて、大きくは『目標に向かえる』『自ら行動できる』『思いやりがある』の3つの姿に集約されると判断するに至った。

これを踏まえ、学習指導要領に基づき、子ども一人一人の「生きる力」を育むことを目指すため、吉原第一中学校区の子どもたちに対して家庭や地域社会とともに三校が育成すべき資質・能力を『あこがれ』『チャレンジ』『笑顔』の言葉で表現することとした。

『あこがれ』とは、夢あるいは目的・目標であり、主体的・協働的な歩みの結果として子ども自らが到達を願うゴールである。そこに到達した姿、到達しようと真摯に努力する姿が、他者のあこがれとなることもある。

『チャレンジ』とは、あこがれに向けての挑戦である。見通しやふり返りに基づく試行錯誤を繰り返しつつ、主体性と協調性をもって確実に歩み続ける姿である。個として、チームとしても、各自が目標をもつことと簡単にあきらめない心の強さが必要である。

『笑顔』とは、あこがれへのチャレンジの結果や過程から得られた充実感・満足感を実感している姿であり、子どもたちがそれまでの営みや成果・課題等を仲間とともに共有し、喜び、認め、励まし合う姿である。

吉原第一中学校区三校は、平成31（2019）年度より、上記目標を、これまでの学校教育目標に替え、三校が共有する「小中一貫教育目標」として設定した。なお、平成3年建立の石碑に刻まれている従前の学校教育目標「いい顔 いい動き」は校訓として位置付け、小中一貫教育目標の具現に向けた様々な活動場面において、一人一人の子どものよさを見出し、価値付けるための指標として活用していくことにする。

◇ 小中一貫教育について

令和6年度、市内全小中学校において一斉に小中一貫教育がスタートし、2年が経過した。本市における小中一貫教育の主なねらいは、「人」「学校」「学び」「教職員」「地域」の5つをつなぐことにより、園小中の「たての接続」と、学校と家庭・地域との「よこの連携」を紡いでいき、「確かな学力の育成」「豊かな人間性の醸成」「安定した学校生活」の実現を目指すことである。

吉原第一中学校区では、令和6年度から共通して日本大学の黒田准教授を招聘し、9年間の連続性・系統性をふまえた教育活動の推進に取り組んでいる。令和7年度からは市の研究指定を受け、「自立した学習者」の育成を三校の研修の柱とし、各校の子どもたちの特長や発達段階に応じ、それぞれの特色を生かした教育活動への取り組みを始めた。令和7年度も三校合同研修会や合同夏季研修会、三校合同企画会議等を計画的に行い、その中では、研修を通しての教員同士の交流を深めたり、各部の取り組みの方向性や具体的方策を話し合うことで情報を共有したりすることができた。また、今後の教育活動の方向性を見通すとともに、各部の話し合いをより焦点化し、具体的方策をより実効性のあるものにするを目的とした組織の再編も行った。令和8年度は新体制のもと、三校の連携をさらに深めながら、教育活動の充実と三校の発展に向けて歩みを進めていきたい。

三校は施設分離型での小中一貫教育を推進していくので、直接顔を負わせての交流の他、ICTを活用した意見交換や発表会などを計画的に行い、子どもたち同士の交流もより積極的に行っていきたい。また、教員も小中間での授業交流を行い、子どもたちの姿を通して各校の取り組みや小中学校の特長を知るとともに、授業改善に向けて学び合う機会としたい。

◇ コミュニティ・スクールについて

吉原第一中学校区の三校は、他地区に先駆け、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づいて、学校運営協議会を設置し、今年度で10年目を迎える。これまでに地域とともにある学校づくりの推進を進めてきた結果、現在本校にはCSボランティアとして、総合的な学習の時間・各教科の授業、読み聞かせ、花壇づくり、図書館ボランティア等の様々な場面で、多くの方々から支援をいただいている。

これらの支援をいただいていることで、本校の子どもたちは地域の方々とながら、吉原地区ならではのよさを知ることができている。また、子どもたちが実際に目で見たり、体験できたりする活動が多く見られることもこの吉原地区の強みである。教科書やネットを通しての学びだけでなく、子どもたちが実際に肌で触れることができる体験は、学びを深めることにつながっている。旧東海道の宿場町であり、歴史的遺産や建造物が多く残るまちのよさ、古くから続いている吉原祇園に代表される伝統行事と地域の団結力と活気、多才な人材と協力体制、行政機関や公共施設、多くの商業施設、市内の各所を結ぶ交通機関等の子どもたちの学びに活かせる素材の豊富さがこの吉原地区のもつ強みであり、今後も教育活動に生かしていきたい。

さらに、これらの学びが成り立つ背景には、CSDの存在が大きいと言える。子どもたちが多くの方々とながらすることは、学びの機会や交流が増えることにつながる。地域の方々の子どものための深い愛情や温かい支援、本校を大切に支えてくださる思いを今後も大切にし、学校運営協議会委員の方々との熟議を重ねながら、学校と地域をつないだよりよい学校づくりにチャレンジし続け、コミュニティ・スクールのさらなる充実・発展を目指す。

4 令和8年度の重点目標

やってみよう!!

＜数値目標＞ 学校が楽しい：95%

学習課題に、自分から「やってみよう！」と挑戦している：90%

本校の子どもたちは、素直で優しい子が多い。しかし、時として受け身な姿が見受けられる。また、本来はチャレンジする力をもちながらも、不安から自信がもてず、チャレンジしない姿も見受けられた。そこで、吉原小の子どもたちに、「チャレンジ」そのものを価値付け、たくましくチャレンジする姿勢を育むことは、大きな意義があると考えた。

令和5年度から、学校経営方針の最重要項目に「子どもたちの主体性を育む」を掲げている。これを受け、令和5年度の重点目標を「わくわくを見つけよう」、令和6年度は「わくわくを伝えよう」と設定し、子どもたちと共に教育活動に取り組んできた。この2年間は、「わくわく」を校内における共通の合言葉にしてきた。この2年間の取り組みを通して、コロナ禍で委縮した活動や子どもたちの心を活性化する役目を果たしたと捉えた。

令和7年度は、主体性を「自己選択・自己決定をして『チャレンジ』する姿」と捉え、重点目標に据えることとした。この「チャレンジ」とは、目標に向かう力、自ら行動できる力を備え、主体性と協調性をもって歩む姿を表していると考えた。そして、一回限りの挑戦ではなく、子どもたちが試行錯誤を繰り返したり、失敗しても立ちあがったりして、あきらめずに何度もチャレンジし続けることを願って、「やってみよう！」を令和7年度の重点目標として取り組んできた。この重点目標のもと、子どもたちの中から少しずつ自らやってみよう活動を始められるようになっていった。学級や学年だけではなく、児童会を中心とした活動や行事の中にも「やってみよう！」の思いが込められた子どもたちの姿が多く見られた。また、教職員の中にも「やってみよう！」を意識した姿が多く見られた。授業の中で、行事の中で、日々の活動や生活の中で、様々な場面で各自が工夫して主体的に取り組むことは、大変すばらしいと感じる。これらの表われは、子どもたちと教職員が「やってみよう！」を共通の合言葉として認識し、自分から一歩前に踏み出していこうと考え、行動した結果であると考えた。

よって、子どもたちや教職員のよい表われを継続し、本校の教育活動をよりよいものにしていきたいという願いを込めて、**令和8年度の重点目標を「やってみよう!!」**とした。表記については、令和7年度の取り組みをベースとして、より多くの、より多様な子どもたちや教職員の主体的に取り組む姿が見られることを期待して、「！」を二つとした。さらに、主体的に自分で決めたことや目標に向かってチャレンジする楽しさやよさを誰もが実感できる学校、互いの考えを尊重し合い、誰もが安心して自分を自由に表現できる学校にしていきたい。

5 重点目標達成に向けての3部の取り組み

◇「確かな学力づくり部」

「授業で子どもを育てる」の方針のもと、令和6年度までは伝え合い・聴き合いの場面を増やし、授業における課題設定・情報収集・まとめ・発信の一連の学習過程において、子どもの主体的な自己決定の場面が設定された授業づくりを推進してきた。この取り組みで子どもたちが培った「伝える・聴く」力は、他者とかがわる中においてとても大切な力である。子どもたちが自分の考えを相手に分かりやすく伝えたり、相手の話を聴くことで相手の

考えを理解したり、よさに気付いたりする学びを今後も展開していきたい。

令和7年度からは、富士市教育委員会より研究指定（学習指導）「自立する学習者」の育成を受け、研修主任を中心に授業研究に取り組んできた。確かな学力づくり部での話し合いを通して、研修の方向性や具体的手立てを決めたり、授業のながれを示した『**『やってみよう』が連続する授業サイクル**』（見通す→実行する→振り返る）を子どもたちに伝えて共有したりした。また、授業サイクルについては、研修主任の説明後、学年部ごとに子どもの発達段階に応じた説明を行った。ここでは単に説明だけでなく、子どもたちと共に学習状況を確認し、今後の目標や手立てを考える時間となった。また、授業サイクルの中の「振り返る」に焦点を当て、全校で授業後の振り返りを書くことに取り組んだ。その結果、子どもたちが書く振り返りの量の増加が見られた。さらに、全ての授業公開において、「自立した学習者の育成」を意識した単元構想や授業のながれを工夫した授業づくりや、子どもたちへの支援の工夫等が見られた。

今年度は研究指定2年目となり、11月20日（金）には研究発表会を実施する。1年目の取り組みを生かしながら、「子どもたちが計画を立て、自分に合った方法を選択して学習に取り組む」「自分の学びを振り返り、自己調整する」ことができる子ども主体の授業づくりを推進する。また、**学習活動におけるICTの活用**についても話し合いを進め、子どもたちの操作スキルが向上し、学びの中でICTを有効活用できるように支援を継続する。

◇「豊かな心づくり部」

令和8年度も引き続き、子どもたちの声を生かした行事を推進する。6年生をリーダーとしたたてわり活動異年齢集団の交流や、音楽発表会等の主体的な自由参加型行事も推進する。これらの活動は子どもたちの創意工夫ができる場であると考えてるので、子どもたちの豊かな発想を大事にしながら、伸び伸びと活動できる時間としたい。

また、学級における係活動や5、6年生による委員会活動では、子どもたちの主体的な活動日々展開するように子どもたちを支援し、励ましていきたい。

さらに、学級会での話し合いを計画的に行い、子どもたち自身が自分や学級の現状を見つめ直し、「よりよくしていくには、どうしたらよいのか。」を自分事として考え、話し合う場としたい。その中で、子どもたち自身が進むべき方向性や具体的な手立て等を見い出していくことを期待したい。

校内における全ての活動の基となるのは学級である。どの子にとっても学級が、「安心できる居場所」「互いに協力し合い、支え合い、高め合う場所」「自分を表現できる場所」であるべきであり、私たち教師も目の前の子どもたちにじっくり向き合い、子どもたちが事象に対して主体的に考え、話し合いを通して考えを共有し、進んで行動する学級・学校づくりに取り組んでいく。

◇「健やかな生活づくり部」

安心・安全な生活を子ども自身が考え、行動できる子を育む。また、教職員は、**発達支持的な生徒指導**「させる」から「支える」への**転換**をさらに推進し、子どもたちの歩みを支援していく。生徒指導については、今後も伝法小や吉原一中の生徒指導主任とも連携を密に取り、三校で歩調を合わせて取り組んでいく。さらに、気になる情報が入った場合は、必要に応じて三校で情報を共有し、互いに連携しながら適切な対応をしていく。

具体的には、どの子どもも自分の居場所があり、安心して過ごすことができる学校づくりを推進するために、学級での観察やいじめアンケートを継続し、子どもたちの困っているこ

とを少しでも早く見つけ、丁寧に聞き取り等をしながらか対応を心掛ける。また、保護者からの相談があった場合は、学年主任の先生や生徒指導主任、教頭先生や主幹教諭、校長等への報告・連絡・相談をして、適切に対応していく。

友達とのトラブル発生時にも双方から事情を聞き取り、担任だけでなく、学年主任や生徒指導主任等と相談しながら、解決に向けて丁寧に取り組んでいく。また、管理職への連絡・相談も行うことで、多くの教師が情報を共有し、多くの目で対応していく。さらに、定期的にその後の様子について情報を共有し、長期的対応も心掛けていきたい。

健康面では養護教諭を中心に、子どもたちの体調の変化やけが等に適切に対応する。首から上のけがについては、特に慎重に対応することが必要である。この場合、保護者への連絡や通院等、養護教諭や管理職と相談しながらの対応をする。また、各種健診の結果から治療が必要とするものは保護者に伝えるとともに、その後の様子を定期的に観察していく。

体育の面では、子どもたちが運動に楽しく取り組み、自分の目標に向かって努力する子どもたちを育てていきたい。不得意な種目にもチャレンジしなければならない時も、すぐにあきらめずに最後までやりぬこうとする子どもに育てたい。また、運動時には、教員が安全に常に気を配ることが大切である。

安全教育では、各種の訓練を実施することで、万が一の事態になっても子どもたちが教職員の指示を聞いて、落ち着いて行動できるようにしたい。訓練の前後の学級での指導も子どもの発達段階に応じて、繰り返し指導していく。

◇本校の喫緊の課題として、特性をもつ子どもたちへの対応が挙げられる。これには、子どもの個々の特性に応じた適切な支援を全校体制で取り組んでいく必要がある。対応の基本として、保護者の理解と協力は欠かすことができない。まずは保護者と担任等が話し合いの場をもち、現状や困り感を共有することから始める。また、事象の要因が複雑な場合、学校の力だけでは対応が難しいケースもあると思われる。そのような時には、SCやSSW、外部機関や専門家などに相談し、多くの目で子どもを見つめ、多くの手でその子どもに適切な支援を粘り強く行っていく。子どもや保護者の困り感を把握し、共に子どもの成長を願いながら丁寧に対応していく姿勢を忘れずに、日々の教育活動にあたりたい。

6 ほっとルーム（R8～）＝ 不安を抱える子どもたちの心の居場所に

令和8年度から、新規に開設する「ほっとルーム」が、教室で活動することに不安を抱える子どもたちの安心する場所「心の居場所」になるようにしていく。ほっとルーム内では、支援員と子どもたちが話し合いを通して、子ども自身が自分で取り組む内容や時間を決め、活動を進めていく。また、学級担任や保護者との情報交換・共有を定期的に行い、そこに居場所を求める子どもたちの思いを受け止めるとともに、一人一人に合った学びを支援する場所としたい。さらに、ほっとルームにおいての子どもたちの頑張りや伸びを認め、励ましの言葉を子どもたちに掛けたり、次のステップに向けての助言をしたりしながら、子どもたちを支えていく。教室内の教育環境整備については教頭を主な窓口とし、子どもたちが安心して学びに取り組める環境づくりに取り組む。

7 教職員が働き甲斐を感じ、安心感をもって働ける職場づくり

◇本校の教職員が心身ともに安心して教育活動に取り組み、教職員同士がお互いに支え合い、高め合う教職員集団であり続けるために、以下の目標達成に向けて取り組んでいく。

- (1) 1か月の時間外在校等時間が、45時間以下の割合を100%にする。
- (2) ストレスチェックにおける働きがいに関する質問項目への肯定的な回答の割合を50%にする。

また、この他に年9回のSD（普通日課4時間、子どもたちは給食後に下校する。会議を基本的に設定しない。）を年間計画の中に位置付ける。その日の午後の時間は、教材研究や事務処理、自信の子育てや家族に関する時間等に充てる。

今後も「明るく、誰もが安心して教育活動に取り組める職場」「互いに支え合い、教え合い、高め合う教職員集団と職場」「職員室等で教職員の笑顔が多く見られる学校」づくりを目指していく。

8 おわりに

「継承と伝承」

歴史と伝統ある吉原小学校を次の世代へとつなげていく

富士市の中心部に位置し、150年以上の歴史と伝統をもつ吉原小学校。保護者や地域の方々の温かい支援と協力に支えられ、教育環境も整った中で、子どもたちの教育活動を日々行うことができることはとてもありがたいことだと思う。また、子どもたちの学びの中で、「知りたいことや見てみたいこと」が生じたとき、「ひと・もの・こと」がすぐ近くにあり、見学や体験を通して学ぶことができるのが、この吉原小学校の強みの一つである。

江戸時代の吉原宿から今に続いている歴史あるまち、吉原地区。人々の団結と次世代を担う子どもたちへの教えを今につなげている吉原祇園祭。まちづくりにつながる多くの組織が整備され、ここに住む人々の安心・安全なまちづくりに日々尽力されている方々。

私たち教職員は、吉原地区の人々の思いが寄せられているこの吉原小学校を次の世代へと引き継いでいく使命がある。教職員一人一人がその使命を自覚し、日々の授業や学級づくり、自分の分掌等への努力を積み重ねるとともに、互いに支え合いながら研鑽を積み重ねていきたい。この積み重ねが、歴史と伝統ある吉原小学校をさらに充実、発展させ、次の世代へとつなげていくことができると信じている。